

六月のカムパネルラ

すずの

白い朝が来る。

引越してからわりとすぐに、床に寝るのが当たり前になってしまっていた。真新しい、ふわふわのカーペットのの上には申し訳程度の掛け布団。座椅子を枕にして眠る日々はそこはかとなく単調だ。

団を机の下に突っ込んで、私はのろのろと立ち上がった。ひんやりとした床を裸足で踏んで、洗面台へと足を向ける。

冷たい水を手にくくって、勢いよく顔をつける。その瞬間、顔の周りのもやつきがふっと晴れて目が冴えた。二、三回それを繰り返してから手を伸ばし、そこで初めてタオルを持ってき忘れたことに気が付いた。タオルを取りに行こうと顔を上げて、ぼやけた視界で鏡を見る。鏡の中の私と目が合って、なぜか視線をそらせなかった。

顔を拭き、座椅子でスマートフォンを手にとると、人肌のような熱さがした。左上の時刻表示はオレンジの楕円で囲まれていて、画面の向こうからは微かに物音がしていた。その度にアイコンを緑色が縁取って、それに少しだけ安心する。

「おはよう」

ふと思い立って声をかけてみるも、返事はない。大分昨日私が寝た後もレポートを書いていたのだろう。締め切りの話をしていたから、きっとそう。スマートフォンを表面をそつと撫でる。指先につるつるとした熱が伝わって、思わずふふつと笑みがこぼれた。ちようど私も、原稿の締め切りに追われているところだった。

しばらくぼうつと画面を眺めていたが、音を立てないよう静かにスマートフォンを床に置く。ほ、と意味もない掛け声と共に立ち上がって、昨日の夜に作って冷蔵庫に突っ込んでいた焼きそばを取り出した。ラップをはぎ取って、ろくに温めもしないまま口に突っ込む。さして美味しくも不味くもない焼きそばを咀嚼して水で流し込んでいると、生きるために食べていることを実感する。人生において、そんな実感はしない方がいいような気がするが。

どうにか朝食にふさわしいであろう量を飲み込み、余った焼きそばを冷蔵庫に戻した。身支度をしようと思いつく。そのついでにカーテンを開けると、今日が雨ということに気が付いた。途端にだるくなつて、まじか、とひとり呟く。天気予報を確認しようとテレビをつけて、ああ、と思わず声が出た。いつ見ても明るいアナウンサーの左上にある日付は六月十五日。六月十六日の、前日。それは当たり前のことではあるが、私にとっては決して軽くない意味を持ち合わせていた。

単刀直入に言えば、二年前の私が告白して、そして振られた日だ。一言で言ってしまうえばそれだけだ。たったそれだけ。

ただそれは、人にはあまり言えないようなものだった。最近が多様性だか何だかで許されているらしいが、そんなものは気休めにもならなかった。幾ら大人が許そうが、その当人に受け入れられなければ意味がない。多様性を認めましょう、不当な差別をやめましょう。今となってはそれこそ意味のない話だった。

優しい人だった。そして才能にあふれた人だった。着飾った言葉を取り除いた先にあるのがそれに対する嫉妬と執着だとは、その頃の私は気づかなかった。そうして傷つけて嫌われて、拗らせた結果がここにいる私だ。

服を着替えて、髪を結う。高校生の時は少しでも格好よくなりたくて、よく髪を短く切っていた。自分が髪を伸ばし、櫛で梳かし、結う。そんな日が来るなんて予想もしていなかった。まだ髪を切る前のときに、カムパネラの話をしたのを覚えている。といっても、確かそれは一方的に私が話しかけていただけだったが。私はその人に、カムパネラらのモデルになつたらしい親友の話をしたはずだった。そういうえば、作者である宮沢賢治とその人も、似たような別れ方をしていた。

日焼け止めを塗る。結局はどこにでもある話だ。「僕た

ち一緒に行こうねえ」というジョバンニの言葉は叶わない。今の私からは、そんなまっすぐな言葉は出てこない。大学生になつても一緒に遊ぼうね、その祈りにも似た懇願に「あなたが私を忘れるんではしょ」と笑ったあの人の表情だけは、未だに脳から離れない。忘れるわけないよ、と呟いた私の声は、ひどく震えて情けなかった。結果相手を忘れたのは、私ではなかったわけだけれど。それでもあれほど苦しいほどだった感情が、ここまで冷え切るなんて思いもしなかった。それが繰り返されるかもしれないのが、怖い。肌にくっつく、あのクリームのべたついた感覚が顔に広がる。

一年前の六月、軽いノリでその人をカムパネラに見立てたことがあるが、最近はあるがち間違っていないかったのではないかと思っている。私がジョバンニ、というのは流石に美化しすぎた気もするが、そんなことを言ったらカムパネラだってそうだろう。私がいじめられたわけでもないし、その人が聖人なわけでもない。手のべたつきが無くなってからパソコンの充電プラグを抜いて、教科書と一緒にリュックに入れた。

部屋の電気を消して鍵を持つ。スマートフォンを手にした。少しだけ暗くなった部屋はまさしく梅雨の訪れの色をしていて、確かにそれは二年前の明日と似た色だった。忘れ物がないか玄関で周囲を見渡してから、またそつとスマートフォンの中の暗い画面に触れる。依然として

相手が起きる気配はなく、時たま生活音に反応して緑色の縁が生まれた。そろそろ行ってくるねと小さな声で言っていて、通話終了のボタンを押しかける。それでも何か物足りなくて、更に小さな声で好きだよと呟いた。慌てて通話を終了する。顔の火照りを冷ますように、勢いよくドアを開けて外に出た。

真つ黒な夜だった。画面の向こうでは、今日締め切りのレポートを書く子気味良い音がしている。どうやらレポートは順調に進んでいるようだった。私はその音を聞きながら何となくパソコンをいじる。隣の部屋ではオンラインゲームをしているのだろうか、何かと話したり歌ったり、叫んだりする声が聞こえていた。

「僕たち一緒に行こうねえ」

ふと、興味本位で呟いてみる。急にどうした、と怪訝な声が返ってきたので、そんな大したことじゃないよと答えた。

「今随筆書いてるんだけどさ、ちょっと気になって。なんて答える？」

「んー、いいよ」

いいんだ？ 私は尋ねて、そばに置いていたお茶を一口飲んだ。喉の渇きが収まらなくて、続けてお茶を口に含む。コップが汗をかいていて、机の上が若干濡れている。コップの底についていた水滴が太ももに落ちて、重

力に従いながらうつと垂れていく。

「あなたが私を忘れるんでしょ、って言わないんだ」

「それ逆になるやつ」

そう、逆になるやつ。相手の言葉を復唱してみると、くふりと笑い声が聞こえてきた。窓の外からエンジン音がうっすらと聞こえて、誰かが帰ってきたことを知る。「どこに行きたいの？ お金貯めないと行けないけど」

画面の向こうから、何でもないような声色が返ってくる。私はしばらく、ぼんやりとスマートフォンを見つめていた。いいんだ。私はもう一度尋ねてからコップを置く。キーボードを叩く音が、いつのまにか止まっていた。

はた、とそこで私は思い出した。カムパネルラって、ジョバンニと一緒にいたかったんじゃないかって。いかなかったけれど、それが叶わないと知っていたから返事をしなかった。できなかった。それなら、あのとき私を拒んだあの人は何になるのか。

あの人は、本当にカムパネルラなの？

少しの沈黙のあと、私はゆっくると言葉を絞り出した。握った拳に力が入る。

「……カムパネルラを返しに行きたい」

「カムパネルラ」

そう、カムパネルラ。あの人みたいなカムパネルラ。すごく優しく才能があつて、ちよつと意地悪な私のカムパネルラ。でもきつと、それはほんとうのカムパネル

ラではない。

あの日。「あなたが私を忘れるんだ」と言ったあの人は、私といたいと思っていたのだろうか。多分、答えはNOだ。大学に行ったらあなたはきっと。そういつて結局、私を無視して忘れたのはあの人だった。

「ジョバンニからカムパネルラを取っちゃった。カムパネルラをあの子に渡しちゃったの」

自分でも支離滅裂なことを言っているなと思った。でもそれ以外言いようがなかった。

「カムパネルラを返したいの。もう、返さなきゃいけないの」

だって、カムパネルラはあの人じゃない。カムパネルラはジョバンニのものであり、私のものではないのだ。そしてカムパネルラにあの人を重ねるのもまた変な話だった。だってあの人は私といたいなんて、きつとこれっぽっちも思っていなかったから。間違ったなら、戻さなければ。返さなければ。カムパネルラを返さなければいけない。

「うん」

相手の声があたたかくて、私は唇をかみしめた。罪悪感で泣いてしまいそうだった。一緒に行こう。その言葉を嗚咽と共に飲み込んで、スマートフォンを握りしめる。それと同時に、最初からカムパネルラなんていなかったんだと気づいた。

私たち一緒に行こうねえ。行こうね。どこまでもどこまでも、一緒に行けるところまで。

アラームの音に飛び起きると、白いひかりが部屋を照らしていた。よくよく目を凝らすと、レースカーテンから水色が透けているのが見て取れた。眠い目をこすってタオルを取りに向かい、その足で浴室の床を踏む。蛇口をひねって冷たい水を手につくって、勢いよく顔をつけた。いつものように洗ってからタオルで水気を取り、顔をあげるとそこに私がいた。心なしか目が腫れている。

今日は久々にメイクをしなければいけないかもしれない。冷蔵庫から食パンとリンゴジャムを取り出してサンドイッチを作る。サンドイッチ片手に座椅子に座り、スマートフォンを手を取った。左上の時刻表示はいつも通りオレンジの楕円で囲まれていて、画面の向こうからは微かに物音がしている。確か今日は金曜日、私も相手も一限から授業だったはずだ。

「おはよう！」

隣の部屋の人の迷惑にならないように、それでも少しだけ声を張る。んん、と声をあげて起きたらしい様子を聞いていたらどうしようもない愛おしさがこみ上げてきて、私はスマートフォンをぎゅつと抱きしめた。

カムパネルラはもういない。それでよかった。それが

よかつた。  
六月十六日の朝が来る。